

75 75期リレーエッセイ

バトンをつなぎたい！

会員 石北 靖洋



弁護士界は、知れば知るほど興味深い世界です。1年目をどうにか生き延び、書き残したいことが山ほどありますが、今、一番お伝えしたいのは、1年間を支えて下さった方々への感謝の気持ちです。

私は、元々、システム・エンジニアでしたが、思うところがあり、弁護士に転職しました。昨今、転職といえば、別の企業に移籍することをいう場合が多いのかもしれませんが、システム・エンジニアから弁護士への転職は、D&Dやドラゴンクエスト的な意味での転職です。もちろん、レベル1からやり直し。全力で臨まなければ、一撃で倒れてしまうでしょう。しかも、弁護士は、他人の権利を擁護する現実の職業ですから、自分がやられるだけでは済みません。依頼者を巻き込むことになりかねない——責任の重さに眠れない日々が続きました。

こと、私の場合、そのような状況になったのは全く自業自得といえます。というのも、私は、その思うところによって、既存の法律事務所へ加わるのではなく独自の法律事務所を構えたのでした。偉大なポストを持たぬは、かくも辛いものかと思いついたわけです。

それ見たことかと冷笑されるのも覚悟のうえででした。しかし、違ったのです。

ロースクールの同期生や司法修習の同期生は、私の事務所まで来て励ましてくれました。司法修習のときの指導担当弁護士や、所属会派をはじめとする諸先輩方は、貴重なアドバイスやヒントを下さったり、人的関係を繋いで下さったりしました。

これはもう本当に有難いことでした。感謝だけでなく、申し訳ないやら情けないやらの気持ちで、また

眠れなくなったことはいうまでもありません。

全く寝不足なので、少しばかり夢を述べるのをお許しいただきたく思います。

前述のとおり、私は情報社会を推進する立場にありましたから、その行く末に多少の責任を感じずにはいられません。情報社会は、確かに便利です。便利ではありますが、その弊害も直視されなければなりません。スマートフォンやマイナンバーカードを持っていなくとも、人間が個人として尊重される社会は、これからも維持されるべきです。そのために弁護士としてどうあるべきか、いつも思案しています。私の「思うところ」とは、情報社会の弊害に対峙し、明るく楽しい社会を実現したいという思いなのです。

諸先輩方も同期も、このことを知っているからこそ、多忙な中であって、無謀な新人に手を差し伸べてくれたのだと感じています。その背景に基本的人権の擁護と社会正義の実現という弁護士の使命の共有があることは、疑いようがありません。

彼らを手本とし、自己でなく他を利する行いを心掛けること。これを自覚できたのは、1年目の大きな収穫でした。

それにしても、私の指導担当弁護士は最高に格好良かった。なにしろ「俺に礼を言うな。未来の新人に同じようにしてやれ」というのですから。当会の諸先輩方も、私の甚だ勝手な思い込みですが、きっと、同じお気持ちなのでしょう。

そのときが来るまで、日々研鑽を積んでいきたいと誓うところです。